

入選

テーマ：多様性を認め合う社会をめざして
「できることから始めよう」

和歌山県立きのくに青雲高等学校2年 玉置結衣

「何でもない」
という言葉を言われると、私は悲しい気持ちになります。

学校の休憩時間、

「もう一回言って〜」

と、私は分からない言葉があると聞き返します。そうすると、もう一回言ってくれる人と

「何でもない」

と言ってしまう人がいて、寂しくて悲しい気持ちになります。

私は4歳の時に、聴覚障がいであることが分かりました。その時から、私は両方の耳に補聴器をつけています。補聴器をつけていても、複数人での会話やささやき声は聞きとるのが難しいです。また私は口の動きを読みとったり、目で見える情報を頼りにしています。だから、マスクをしたままでの会話、電話や放送などの機械音声は聞きとれないことが多いです。

皆さんも、聞こえない状態がどういふことなのかを知るために耳せんなどをして体験してもらえませんか？ 耳せんをしていると音がこもって聞こえにくくなります。そして、相手の顔が見えない状態だったり複数で会話されたりすると何を話しているか理解できなくて、不安になりませんか？ また、外では音がどの方向からしているのか分からなくて怖くなると思います。そのような状態を、聴覚障がいの私はいつも体験しています。

聞きとれない時には

「紙に書こう〜」

と言ったり書いてくれる人と

「書くほじゃなから〜」

と断ってしまう人がいます。私は、口話で説明されても騒がしい場所では聞きとれません。そのような時には「筆談」をしてもらえると早く理解できます。聞きとれない時に、聞き返し教えてもらって理解するようにしています。つまり、私にとって「聞こえないから仕方ない」ではなくて、「聞こえないから聞き返して教えてもらうことが大切」なのです。「何でもない」と言われると、言葉のキャッチボールが続かなくなり、友達との会話が減ってしまいます。

私は小学校6年生までは地域の学校に通って、中学校に進学する時地域の中学校に進学するか、ろう学校中学部に進学するか迷いました。小学校の時は週に1回「ろう学校通級指導教室」で言葉の勉強をしていました。だから、少人数で言葉の勉強も教えてもらえるろう学校に進学することに決めました。入学して思ったのは「手話が早くて分からない」ということです。私は入学するまでに、指文字と簡単な手話を覚えました。でも、ろう学校の生徒同士の手話は流れるように早くて分かりにくいのです。聴覚障がいの人の中には、声を出すことが苦手な人もいます。だから、健聴の人達が口話で会話しているように、手を使って会話しているのです。

私は、ろう学校と地域の学校と両方の学校生活を体験しています。その経験から、障がいのあるなしにかかわらず、お互いに理解し合うことが大切だと思いました。手話だけでなく口話だけでなく「筆談」もある、お互いに融合していける社会であってほしいと思います。

私は、これから聴覚障がい者、健聴者、両者とコミュニケーションをとる中で、将来社会に出ても積極的に交流を深められるように成長していきたいです。「できることから始めよう」私は心にあるこの言葉を育てていきます。そして、皆が笑顔で「共に生きる社会」を築いていくことを心から願います。